[illegible]新語

リ 5
7962

門 95
號 7962
巻

早稲田大学図書館
昭和 35. 7. 11 購入
蔵書

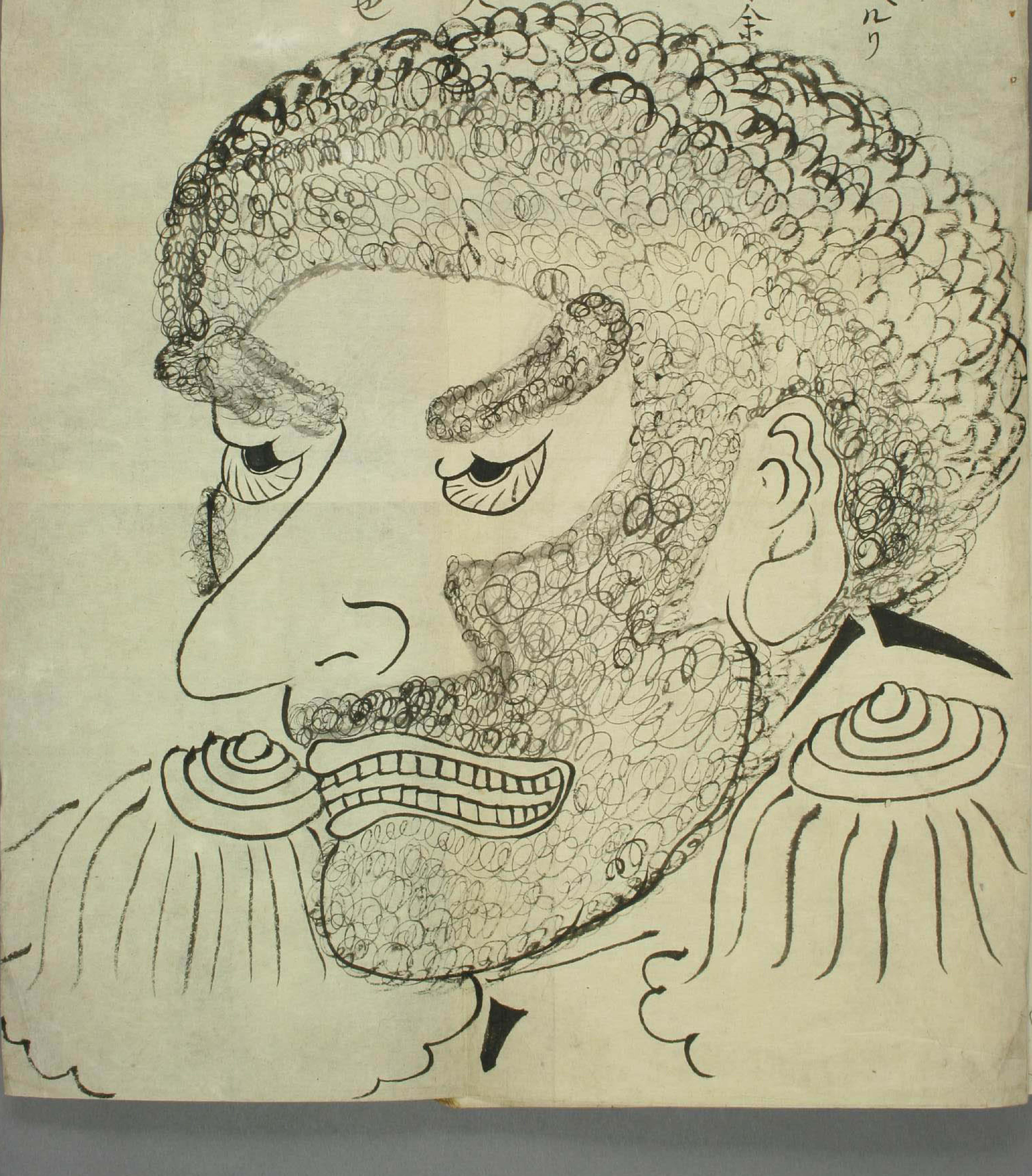
亜墨利加大将ペルり

セイノ高サ六尺有余

衣服白ラシヤ

米俵但一斗五升入

ようやく持ル位也



2

京都大學圖書

嘉永三戌年薩州侯ゟ差出候翰之写

同月九日辰之刻　凡六七拾里沖合へ異国船六艘相見へ候ニ付早速海岸附
番所向へ差立之候方申付置候処、右之船追々近寄候ニ付毎年渡来之
商船之儀と存候得共、渡来之節ハ琉球国へ拂英両国之軍艦度々参り
交易致し度段申立候ニ付、兼而海岸并ニ所々番所向之大筒石火矢を
数十挺備江家来之面々海岸番所へ為相詰置候処、其日異国船拾五里程
沖合迄近寄碇を下し日本地方様子伺ひ候様子ニ而近寄候ニ付一時も早
拂ひ候様存候処、翌十日異国船近々寄来之刻ニ相成、竪横十文字之
簾巾を立白帆三段ニ而十分風を含ミ走り来り候ニ付兼而用意の者共へ

其外数千隻之火船ニ而待居候所弐拾町斗沖手ゟ乗り帆をおろし候
節成丈ヶ石火矢をおろし其節遠見役之御軍艦之内ゟ遠石火矢
数百つを捧ケ頭之方之を三段尾之方ゟ四段使ひ異人船之櫓く
上ニ乗り居候者十人斗（チリチリト）或者遠屋境ゟ渋原湖ニ之飛
相見へ箱下る御感状得て嘆咾喇嘎国之軍艦ニ相考へ直様打破らんと
軍艦より見合大炮数百一時ニ相放し檣三本往打折船中ニはさん蛮之
数百打込候得共更ニ破船之様ニ無之唯黒煙り立斗破船なりんは
さんばん共打放し候得共弐方之格別之損ニ無之拾弐三人斗頭伯
服等被れ死ハ致し候得共異人共遠海測量之間ハ無之毎ニ弐方陣
家江壱町斗手前海中へさんばんを打込海水沸騰し恰も雷の

如く異人共ゟ何程か中途より一発も放さず巻又船底へ隠れ候事ニ而やと
衆評之上益々御放し候得共少しも弱るく気勢もなく表面ニ相見へ候船ゟは
不残焼失ニ相成相見へ弐日之申刻迄激ニ揺戦天を焦し地を震ひ壮士
沸騰之勢ひ弐百年来稀成事ニ候故海上海岸ニ至るまで白煙り起り立
日輪朧月之如く相見へ候諸士之面ニ何方も貝鐘太鞁之響ニ耳鳴り頭
脳へ唯志んしんと字へ日中夜を失ひ唯敵船ニ而みる望周ニ捧へ其夜
すし候不眠陣所之へ高張松明をてらし其夜五十一日敵船ニ見候ニ
破船ニ相見へ候付翌日相見候ニ与力を以て相手ニ見届候人とて一人も無之
船中へ乗移り人ニ而もし不船高く乗合の不能此船長サ四拾五六間
巾九間余有之高サハ是ニ順し候所左早速階子持来り勇士等

三拾人斗宛入船中ニ見届ケ不申候得共之ニ而打破られ死し候者凡六百七
八拾人斗炮疵ニ而性命有之者拾七人其内五人ハ助り候ニ付拾ひ候ニ付
腰鎖取上生捕り候処何国の船哉ト承り候処イキリス国の軍艦
ニ而六艘共ニ訴人ニ差出し候処発炮致し日本へ渡海交易を相願
候処件者之節も撫戦之治定ニ而家来ニ者六艘迄参り罷越候交
易願之役前ニして渡来仕候類船五艘ハ見のれて琉球之地方へ渡
海仕候家来ニ申付交易之願差上度存念ニ而不申其撫戦ニ相成候ニ付兼
用意之大炮ニ而間合申候折ニ始末残念之至り将又申出候猶又
能々吟味之上ニ而上度其船上ヨリ廻し五隻ニ相成候ニ付窮ニ救ヒ
之死骸は被打取候海水入り候而一統ニ而申出候ニ付死骸并ニ船其後

所之右書船自ら当国之為守衛り向中申出候今般撫戦異国船を打
拂ひ候節仕候儀言味を考へ申し候処ニ付不仁不法之戦ひ様ニ
候へ共得其処左様不被遊候へ近来異国船ニ参る節時節柄猶更者
家来之面々能々心得不法之被方不仕候折柄テ子ニナカ船渡海交易
願出候得共御免被為仕儀ハ咲喇唖人共心得居在軍艦ヲ以渡来仕
候節ニ付今般撫戦之一条ニ家来共西洋之思ひ怠り候ニ付被下置
聞御直ニ御含被下度奉存候以上

嘉永二酉年

二月十二日

松平大隅守

弘化二巳年中渡来長崎表ニ在留致居候阿蘭陀人嘉永三戌年参府仕
候節口上之写

一戌三月十五日阿蘭陀加比丹参府御門礼之節申上候ハ暎咭唎亜国より交易
之儀奉願候処御許容無之儀ニ相成候ニ付右之世援軍艦を以向後阿蘭陀之儀ハ
二百年来前段御恩澤を蒙り罷在候儀ニ付屹度御手向ヒ不仕候得共同艦
国之儀ニ付右年間暎国江加勢軍艦并軍役ニ罷出し可申筈ニ御座候此段ハ兼而
御届ケ申上置候

嘉永元申年右同様致参府候節同年参府之上極密之横文字を以申上候条
之写

加比丹

ヨリセフヘキリニ
レイソン
名年五十歳ニ罷成

外科

ナツトモニニイ
キス
名年三十歳ニ罷成

一日本国ヘ四月八日ニ相当り候日暎国出帆仕候新規定先年渡来之節交易之儀
以書翰御断り之軍艦を以向後阿蘭陀国之儀を世援右同国江援兵之字筆ヲ
御国より交易仕度旨申来之候得共御断之命を蒙り候間自分より御敬對仕候訳ニ付右を
世話仕候間此段ハ兼而御届申上置候

嘉永戌年三月五日

右之通申上候処肝要之御場所御固之御評議在之海岸御見分之上

最初御固ト被仰付候左之通

一 異国船渡来之節ハ酒井雅楽頭様御先陣ト成度旨御願ト成候事

一 相州江之嶋手前腰越之浜へ御台場補理有之大筒並ニ兵庭在

是張人数附置異国船渡来之節ハ出張ニ候事

一 相州鎌倉　壱ヶ所

一 同 城之嶋　〃

一 同 松輪浜　弐ヶ所

右五ヶ所御台場松平誠丸様御固ト被仰付候事

一 相州北小浜　壱ヶ所

一 同 津久井　〃

一 浦賀三湊　〃

一 同 走水

一 同 大家浜

一 同 猿島

右六ヶ所御台場井伊掃部頭様御固ト被仰付候事

一 房州百沙浜　弐ヶ所

一 同 洲之崎　壱ヶ所

右三ヶ所御台場松平下総守様御固ト被仰付候事

一

一房州太房ニ濱　壱ヶ所

一同　竹之岡　弐ヶ所

一同　富津濱　壱ヶ所

右四ヶ所御臺場羽州松平肥後守様御固ニ御座候

一武州大森ヶ羽根田海邊松平丹波守様御固ニ御座候

一江戸表築地海邊其外御固

松平時之助様

青山下野守様

松平越中守様

右之通ニ御座候

此外所々御旗本衆相固ニ御座候

嘉永六丑年六月上旬相州浦賀湊江異國船渡来之注進届書之写左之通

嘉永六丑六月三日未之刻相州浦賀表江異国船四艘渡来之趣注進有之

候ニ付浦賀奉行より為見届ケ之御備番船一番手佐倉銅太良弐番手

中島三之助三番手香山栄左衛門其外与力同心和蘭陀通辞唐通辞等

乗出し候所既ニ湊口江乗越江戸方江向て走廻り候所迅速之事ニ而程ニ浦

湊沖江碇を下し申候実ハ北亜美理駕州之内共和政次（ワスヒクトン）

より願之軍艦アメリカ国王より和朝大王江使節之由右軍艦四艘之内

蒸氣船（ストンムシフ）弐艘此内船官之乗船（ストムシキツフ）船長サ凡三拾六間余巾八間余

有之檣二本各縄階子有之後ニ少し小檣壱本有船ハ鉄ニ黒塗ブリツキにて
拵家根之如く張有之水際より船ハ鉄ニ而底ニ銅板を包有之右之
中檣之前ニ蒸気之廻り車左右ニ一輪宛鉄ニ而割造り車丸ケ径五間程
中ニ丈余り車輪船より外ニ仕出し両輪ニ半分上半月ニ成白塗ニ致
有之後ニ凡六間程船之内ニ出し右左ニ中程ニ而蒸気之煙出し筒
舵壱本後ニ出し立丈長ケ五間程竪径凡一間程有之穂ニ窓二ツ有之
大砲表ニ左右ニ壱挺ツヽ弐挺中檣之前檣之間左右ニ挺ツヽ都合拾弐挺
ケウエーレル ヒストン筒ニ士官士卒組有之士官子人数二百人程ハツテイラ船六艘
白塗黒塗有之是ハ蒸気船也家国の傳馬ニ而用ひ副船ニ而蒸気
船を割造り有之傍ニ而用し縊金ニ而屋形有之窓有

生中ニ鉄の形有之左右ニ亜美理駕之印 ☆ 如此金ニ而形付有之上ニ小
キヤマン板ニ而窓四ツ下ニ四ツ下タニ窓を明ケ夜鉄の上ニ而戸有之甘ニ而都合
前ニ用し揺之船ニ付合より縦し五九ヘツト軍艦ニ而方船長ケ二十五間
程中六間程檣二本各縄階子有之船底ニ銅板ニ而包左右ニ黒塗門中程ニ八
白塗ニ而船縁ニ白塗ニ而仕切有之穂先ニ金の屋形ニ而形付穂ニ風入窓二ツ
鉄延金の割戸左右中程白塗ニ而前ニ大砲拾壱挺宛艘ニ弐挺都合弐十四挺
人数弐百人余ケウエーレル ヒストン筒ニ士官士卒相乗居ハツテイラ八艘百五九ヘツト小ニ而方長ケ
幅檣壱本前ニ用し大砲左右ニ拾挺ツヽ人数百五十人余小砲前ニ用しハツテイラ
船ニ六艘有之右四艘ニ大砲備付有之船中小銃拾挺有之比何れも加擬
筒也

當月朔日大清乍浦港出帆蒸氣船一艘ヱヒヘワト船式艘花旗来り由
聞けるより先達而来り候船の別手にて南方へ往候者渡り来り由此度渡来之船
亜美理駕国ワスヒンクトンと申所に居る者全ワスヒンクトンと申者にカルホルニヤと軍艦の
よし亜美理駕総て拾弐ケ国有之ワスヒンクトンを亜美理駕一都の国主
に相成申候ワスヒンクトンと申者立候哉又カルホルニヤハワスヒンクトンの属国ニ近年
割取ニ而追て大国ニ被成候アメリカ之通商之儀を願出候由
彼唐キ今度ま本を清使に而来り候由右之返翰を以て
来る七月比来るべくとの由尚又和蘭陀通事ニ而当年中返翰来る
事ニ而候来年六月比者数艘之大船軍艦にて渡来之由申候
又夫々之儀は小唐土大清広東之戦ひ等之諸事相分り候

一件之漢国之儀大清之事は明之皇孫蹤跡亂ひ
従来より荊州湖南より湖北洞庭湖辺に至り段々従ひ候由右四
艘之使節船ハ日本之五月十九日ニ小亜美理加馬ワスヒンクトン港口出帆大清蘇州
乍浦へ渡海六月朔日同所出帆又琉球国之船を出同月ニ浦賀表
日九日於久里濱ニ書翰受取并例之通御手当左之通

浦賀御奉行
戸田伊豆守

御役所兵士家来馬上ニ騎馬足軽士卒
弐拾挺鉄炮四挺
人

同
井戸石見守

人

支配組頭

辻茂右衛門

与力同心

馬上壱本 人数六人

惣指揮 与力四人

隊付 与力四人

銃指方 同心弐人

奉行例固与力七人

西洋流鉄炮師範役

下曽根金三郎

馬上[illegible]壱本

銃隊指揮 与力 弐人

太鼓役 同心 壱人

銃隊 〃 壱人

浦賀御番所固

与力弐人 同心 二十人

井伊掃部頭陸固

番頭八人 物頭拾弐人

惣人数千弐百人 但し番頭壱人ニ付 足軽廿五人充

松平誠丸陸固

番頭弐人 物頭四人

惣人数七百人

松平肥後守陸海固

番頭物頭 固船百三十五艘

松平下総守海固

番頭物頭 固船七十弐艘

亜美理駕人者ハツテイラ船拾四艘ニ而上陸

上官 壱人
名ハマツテイシル
官ハナツフル セフヘフール
年齢六十弐位
郡家老中ニ當ル
服 緋服引白
イホレツト多く有て亙足ハ金の總有り

将官 壱人
名ハフカナシ
官ヘツエルヘツフル
年齢五十弐位
若年寄ニ當ル
服 緋イホレツト上官よりかし付有之

副将 壱人
名ハアタムス
官セスフエル テレアトシラ
年四十五位
服 緋イホレツト次オニかし

キンテレ 四人
諸士吏ニ當ル
年五拾弐位弐人
四十五位壱人
三十五位壱人
服役引日し イホツト次牛オニかし

ロイテフン ナフシイール 拾人
士ニあたる也
服役引日し全總の汲を芇しヒストン揺ホ有
汲ナ様て指揮をなすなり

オフシイール 六十人有
与力ニあたる也
服役引日し 尉士率ニ遣

ワルターし トロ 百八十人
足軽ニ當る也
服白役引伴

大太鼓役 壱人
小太鼓役 壱人
横笛 指ニ笛 二人
長サ五寸程 立笛 壱人
曲り笛 二人
ナヤヒメル 鐃 二人

役佩役引白

惣人数四百六十二人ニて上陸也

紺緋地白☆如是籏壱本船官之先ニ立赤白角ニ緋白船印　同所ゟ此籏五年ニ此度へ掲て
度〻ニ有り大壱艘連来り此六月九日巳之中刻於久里濱之村之書翰受取相済其午刻
一同引取久里濱沖江船ヲ乗出し蒸気船四艘同所沖ゟ浦賀沖ヲ乗越浦賀沖ニ乗居
ユルヘツト船ニ艘日時之碇ヲ上ケ四艘共観音崎ニ乗越候ニ付浦賀御備青船四艘ニ而
追ヲ武州杉田村沖に船を留同月十日巳之刻ゟ之方之ユルヘツト船下総之方ヘ向本牧
沖へ船を乗り出し午之下刻杉田へ乗戻し翌未下刻蒸気船午の刻荒海を乗越し
十二天ゟ二里程沖合ニ船ヲ留神奈川港沖へ船を乗入所之測量致申中刻
杉田浦沖へ乗戻四艘共杉田沖へ船を留同十一日申の刻本牧猿嶋を乗て水村〻近山へ
間より猿嶋へ乗る大津村地方ニ四艘共船を留同十二日巳午之刻向ケ走り去蒸気船壱艘
ユルヘツト壱艘先ニ乗出候其外の船も六月十二日浦賀奉行ゟ異国船へ送り候ニ付外之通り

一綿　五巻　一吸物椀　五十人前　一喜世留　五十本
一團扇　四十本　一鶏　百五十羽　一玉子　千箇

異国船ゟ香山栄左衛門へ通弁之嫁ゟ世話之為懐中ゟ送り越し候品左之通り

一白木箱壱ツ　長弐尺八寸余巾壱尺余厚七寸位文字西洋之真字ニ而不知也
一円　壱ツ　竪五長壱尺八寸余　八寸四方
一青漆塗箱一ツ　竪壱尺五寸余巾壱尺八寸厚サ右之者青貝文字吉祥と申し候也
一 　硝子瓶入之ニ而そナと壱ツ九五升入程但口斗出し有是ハ酒壺なるべし
一白木綿之毛袋一ツ　唐其渡し壱尺八寸程長サ六斗ヲ入之牛肉之塩漬ケ
一何か不知唐傍物之刀箱一盃　是ハ水を入れ手振ル字斗
一以入ハし　壱文

同十四日異国船出帆後焼捨ニ相成、献上之品左の通り

一羅紗　壱疋　一カナキン　四十疋　一茶用白砂糖一小かめ入　但し目方七斤程入候

一籠入大小壺之一陶　但えんりの酒のよし

一草木之種　一箱　　一ホートル　壱瓶

一アメリカ国之図之絵図　壱枚　　一蒸気船之図　壱枚

一将官画像　一幅

一小人之八ニ　半ダ　　一牛肉　弐十斤程

〆

此外色々之絵図有之よし

但し御門前ニおゐて焼捨ニ相成

亜美理駕国主ゟ送り状ハ当番十六月十三日江戸江相廻しハ右附添として　与力

中嶋三良助同心組頭中村氏右衛門附役大谷榮五良十四日巳ノ中刻江戸

井戸石見守役宅江着夫ゟ御城内御中之口御張紙下ニ而未ノ中刻御勘定

奉行松平河内守御勘定御殿詰組頭後藤市良兵衛岡田増五良両人ニ而

上河内守江御渡し来之下刻引取同十八日ゟ出立十九日未刻迄浦賀表へ相成

異国船渡来ニ付諸向ゟ御注進御届書之写

先刻御届ヶ申上候異国船之儀ハ北アメリカ合衆国政府仕出軍艦ニ而大炮

二十余挺并鉄張之蒸気船ニ而一艘ハ大炮三四十挺ハツテイラ船ハ鉄張

之様子ニ見請候一艘ニ大炮十二艘右遠近自在ニ而櫓械不相用迅速ニ出往

応接之者も当七日迄之中御沙汰ニ候ハヽ蘭国ニ而主ニ申立候旨奉行
申渡置候得共、中々承知不致、江戸へ直ニ乗込候由申立候間、我儘之挙動も難計候ニ付、猶又掛り之
軍艦数艘追々渡来致し候様ニ相成候而者、御国法
相立不申、且又右異国軍船ニ而此上之変化難計、只々応接中ニ而者、先ツ此
段申上度如斯御座候、以上

六月三日

浦賀奉行
戸田伊豆守

今三日未刻、相州城ケ島より二里程沖合ニ異国船四艘相見へ候ニ付
地方へ近寄り候ニ付、早速人数差出、猶又大船ニ而富田村浦賀下沖合へ乗入候段、相州
陣屋詰家来共共追々中越候、吾々持場所へ出張致候ニ付、此段御届申上候

以上

六月三日

井伊掃部頭内
富田権兵衛

今日八ツ時比、浦賀之方異国船二艘見え候ニ付、武州船手之者、富津番所より出帆致し候処、
人数之者、本牧十二天ヶ州海岸へ操出し、船数二艘千駄ヶ崎沖合迄乗参候
富津詰家来之者共申越候ニ付、此段御届申上候、以上

六月三日

松平肥後守

昨三日未之刻相州沖合ニ異国船四艘相見へ追々浦賀表之方へ乗込候ニ付手当
向見張并番船等差出置候処房州北條陣屋家来
之者より申越候ニ付此段申上候

六月四日

松平下総守内
伊東佐左衛門

昨三日未之刻洲崎沖ニ異国船二艘比浦々通り二艘浦賀表相向
候ヶ様相見候旨当番之者より申付候ニ付早速援兵船差出候浦賀
奉行より達有之ニ付一ヶ先之二ヶ先迄手当人数差出候処大津陣屋詰
家来之者より申越候ニ付此段申上候

六月四日

松平誠丸

今朝御届申上候異国船四艘之儀浦賀表ニ碇泊致居候処乗組之者より端船を
以近辺取締之者江相渡候処船ハ近辺ヘ参候ニ付[illegible]
[illegible]一通近辺ヘ[illegible]候処彼方より[illegible]
浦賀奉行より達有之候大津陣屋家来之者より申越候ニ付此段申上候

六月四日

松平誠丸

今般之船ハ北亜美理加合衆国コラレヒストト申処より軍艦四艘参候趣ニ而
船総之異様浦賀奉行与力へ申出候由ニ御座候
檣ニ本有之九七八間位六艘目[illegible]

一艘ハ右船ニ而車仕掛ニ而煙ヲ上ケ致運送候船ニ而右之趣捜索候所
実ハ先手船大サ拾間程本船大サ七拾間程ニ候先年渡来之節ハ八百人乗ノ船ニ候
人数ニ而有之候処今日八ツ半時浦賀表へ異国船壱艘又々相見へ候由武州船宿津
何れも異人数多乗組台場手結ニ付候ヘ共先ツ此段御届申上候

六月四日

松平誠丸

諸向御達并御沙汰之写

浦賀表へ異国船渡来ニ付其方共御固之儀申達候
手速出立致候様可申渡候尤御沙汰次第出立可致候

浦賀奉行
井戸鉄太郎

諸大夫へ相渡候
大目付御目付へ達候書付

鉄太郎父
石見守

今般浦賀表へ異国船渡来ニ付万一内海へ乗込候儀も可有之哉ニ付品川表
節ハ万石以上之面々ニ而鋪候心得ニ而心得之上急度可相達候

右者猶後守中聞

六月六日

今六日夜四時頃老若様方廿八ケ所へ御達之事
浦賀表へ異国船渡来ニ付
海岸御備之儀

御月日
戸川中務少輔
松本重　謹

六月御目付方へ相達候書付

此度浦賀表へ異国船渡来いたし候ニ付御書所向国家之儀ニ付猶又厚心得候様

可有之旨上様ニ而御申渡之上相達候事

右書付伊勢守申渡

異国船内海へ乗込候節ハ時宜ニ寄若年寄出張いたし候ニ付而ハ其方共之内壱人

之面々打寄壱人つつ其余四五人つつ組合ニ而相定置若年寄之差図ニ随附添可致出張候間兼而

心得罷在可申候

浦賀表へ異国船渡来ニ付

内海乗入候節之心得

右書付遠藤但馬守申渡之

同月付

堀織部

六月附御目付へ達し書

此度浦賀表へ異国渡来ニ付而者銘々持場向其外夫々御世話有之候得共

猶又心得方之儀ニ付而ハ

右之通若年寄より申上候ニ付相心得可被罷在候

右書付伊勢守申渡し

一本牧　細川越中守　深川辺　立花左近将監　鉄砲洲・佃島　松平阿波守

品川御殿山　松平越前守　大森羽田　松平大膳大夫

濱御殿　松平讃岐守　高輪辺　酒井雅楽守

右者同役遠江守松井助左衛門を以御目付方へ相達ス

牧野備前守殿浦賀奉行へ御渡候ヶ条

此度浦賀表江異国船渡来ニ付而ハ用意向ハ平常与ハ格別手厚
ニ致し取締り方入念平穏ニ相済候様精々心掛可被致候事
右之趣井伊掃部頭始四家之面々へ相達候得共其外井伊方ニ茂右等之趣
相心得候様相達候間
前同体不失機相心得候様可被相達候事
六月廿九日　未之中刻達

一　別紙之通細川越中守松平大膳大夫方へ相達候ニ付写相渡申達候

松井助左衛門
竹内清太郎
大久保忠左衛門
都筑金三郎
戸川中務少輔
川路左衛門尉
石河土佐守
深谷遠江守

戸田伊豆守
井戸石見守
松平大膳大夫方江

大森町御備場御固御心得ニ付而者本牧手前上へ相進船出し候節浦賀奉行并
井伊掃部頭松平誠丸へ相進出細川越中守方ゟ請継、右之者得と請継
伊勢守殿伯耆守殿ゟ御達ニ付右相進船目印請継等之儀ハ越中守
方ゟ（より）相含置候事

但浦賀奉行組之者共ゟ上使之儀ハ請継ニ不及候

右之通ニ付御心得候様浦賀奉行并掃部頭方へ茂相達置候

細川越中守方へ

本牧辺ニ罷在候心得ニ付候て猿島辺迄ハ漕進候所、右浦賀奉行并揚組之人
識九ヶ所漕進出杯申候ニ付、無余儀其所ニ而見継、本牧手前ニ而大船者丈漕進船目印ニ江
見継方之義者兼而委細相含罷在候事
右之通ニ而心得、尤浦賀奉行并ニ家之面々へも相達し候事
六月十二日辰上刻達し

一異国船并内海へ乗入候節、非常之場合漕進及候ニ付候ハ老中ゟ代官并浦賀大目役へ
相達し置、右乗手早目之出来之節、船ニ積込置候様申合置候、右を掛大目付へ相達し、見継
見継之手筈迄ハ聢与申合置候事
右之通大目付役へ相達し置候ニ付、大目付衆并申合候様可被致候、右浦賀奉行之御備向申合候

御日積ニ而相心得、登城又ハ持場ニ而相心得候様可被成候、尤其外具足を其用ニ様ニ
一ニ心得之儀者、右之場末之半陸行屋不申候間、万石以上之方ハ見櫓ニ而
兼而其節限早半鐘ニ而相知らせ候様可被成候
右之趣可申合旨被申候
六月九日
異国船渡来中
火消盗賊改上附
御先手 金田式部
松平采十郎
賊等之儀ハ、兼而申合候通、万石以上ハ申付候
其外向々も心得を以、異国船渡来彼是御門候節ハ御用も

是迄諸家勝手不如意依之此度於 公儀も五ヶ年之間御倹約被仰出候
畢竟之間右年限之内是迄被仰付候格別諸事雑費を省武備之励一同
力を尽し可申候且万石以下之面々迄も減少之衣服飲用不奢事ハ勿論之
上候処是迄家作向之事之處無益之衣類振合之準格別之倹
約相心得此度御沙汰之趣能々行届候様一同厚相心得能々御取調之儀ハ
是之間此度其筋之事是之間ハ夫々御沙汰之御用ニ而候

七月廿

右大目付伊勢守殿本多安藝守殿江御渡

御使番
梶野与左衛門
根岸九郎兵衛

大目付御目付江達

西丸御普請ニ付万石以上取り上上納金被仰付之面々并万石以下之者割上納金之儀ハ
打振候儀是迄之通御上納金之儀ハ勿論 御沙汰之趣右之趣厚相心得武備之儀別而
心掛候様被仰出候事

右之趣万石以上以下之面々江可被相触候

七月十日

右書付 阿部伊勢守殿御渡之